



# プレーパーク レポート

第2号

2021年12月

小鹿野町



12月は「おちばであそぼう！」をテーマに  
たくさん遊びました！

冬晴れの日、11月のプレーパーク開催時に大人たちで集めた大量の落ち葉が山のように積まると子どもたちからは歓声があがりました。落ち葉の山に飛び込む子どもたちの様子を見て、プレーリーダーと周囲の大人たちが飛び込み台を製作。次々に落ち葉の山にダイブしては埋もれる子どもたちとニコニコと笑顔で子どもたちの遊びを見守りながらホウキなどで落ち葉を山に戻す大人たちの姿が印象的でした。

熊手や雪かきスコップを使い落ち葉を山のように積み上げたり、移動させることに夢中な子どもたちの姿は勤勉そのものでした。特に大人に指示された訳でもなく、黙々と集中しながら道具の使い方が上達したり、時に声をかけ合って協力したりしていました。私たち大人は、子どもを指示待ち人間ではなく自分から動ける人に育てたい、協調性のある人に育てたいと思っていますが、「何かをさせる」ことで子どもの主体性や協調性は育ちません。楽しく自由に遊べる環境があれば、子どもは自ら育つのです。

また、今回は木にロープを張ってモンキーブリッジを作ったり、木工遊びや焚き火も楽しみました。

## ハイライト

- ▶ 楽しみ方はそれぞれ：落ち葉の山に段ボールでつくったトンネルを埋めてくぐりたいとのアイデアからスタート。落ち葉を積むことに一生懸命な子どももいれば、トンネルに入ってみたい子ども、つくったトンネルに上からのって潰したい子どもも。トンネル遊び一つとっても誰一人として楽しみ方が一通りではありません。互いのやってみようことを主張し合いながら、絶妙なバランスで遊びとしてトンネルづくりが成り立っていました。
- ▶ 非言語コミュニケーション：モンキーブリッジで自然発生した鬼ごっこ。子どもたちから明確に「鬼ごっこしよう」と提案があった訳でもないのですが、誰かが追いかける素振り（または追いかけて欲しい素振り）を見せて、互いに気持ちをキャッチし合って遊びがスタートしていました。遊びは相手の気持ちを推測するというコミュニケーションの基礎にもなっています。

# ミニコラム：遊びは子どもの主食です。

「遊びは子どもの主食です」という言葉は日本医師会と日本小児科医会が作った啓発ポスターのタイトルで、現在、多くの小児科などに掲示してあるものです。

子どもの生活には遊びの他にも学習やお稽古、地域活動など様々な時間が大切で、そのバランスがとれていることが理想です。しかし、現代は幼少期から学齢期での遊びで身につけておくべき基礎がないまま中高生になってしまうケースも少なくありません。

今、多くの小児科医を中心とした医療従事者が病院を訪れる子どもの心身の発達を危惧しています。正に遊びを主食として育て初めて、自らの人生を切り拓くために必要な力がつき、学習やスポーツなどに打ち込む楽しさを感じられる様になるのです。

- 遊びの中で身につけた物事への探究心が学習や労働の意欲につながる。
- 遊びの中で身につけた他者との関わりが人間関係の円滑な構築につながる。

教育学者の汐見稔幸氏の言葉に「私にとっては遊びは人生を手作りする練習そのものでした」というものがあります。

小鹿野で育つ子どもたちのこれからの、多くの遊びの機会が保障されることを願いながら、地域のみなさんたちと一緒に良い遊び環境づくりに取り組んでいきたいと考えております。

## 大人も楽しみながら遊び場づくり！

モンキーブリッジのロープを張るのは多くの大人の力が必要です。「普段使っていない筋肉つかったなあ…(笑)」と笑いながら話していたお父さんやお母さんの活躍の場面をきっとお子さんたちは誇らしげで頼もしく感じているはずです。遊びに使う木材のピースをノコギリでカットしたり、焚き火で遊ぶ子どもの見守りや、木工にチャレンジする子どもの疑問に寄り添い関わったり、たくさんの大人の協力でプレーパークは成り立っています。大人も楽しみながらをモットーに遊び場づくりを続けていきます。ぜひ、遊び心を動かしてご参加ください！

